特集記事　この家でこの地域で生活（くらし）つづける　その2

「家で過ごしたい」夫の最期の願いに寄り添って

岡島正（仮名）さんは今年の四月、家族に見守られながらその生涯を終えられました。地域では町会長を10年以上続けられ周囲からの信頼も厚く、また家の中では愛妻家な一面を持っていた岡島さん。病院が嫌で、何とか家に帰りたいと強く望んでおられました。「本当に病院が嫌だったんでしょうね、入院中は病院で出されるご飯が嫌で毎日私が持って行っていました」と語るのは奥さんの恵美子（仮名）さんです。恵美子さんも何とか夫を家に帰してあげたいと考えていましたが、重い病状の夫を家で自分一人で看病ができるのかと不安で、なかなか決心がつかなかったそうです。

たくさんの人に支えてもらった在宅生活

一時的に退院することが決まり、自宅での病状ケアのためみなと生協診療所と訪問看護ステーションさくら通りの訪問診療と訪問看護が始まりました。奥さんは当初は延命治療等は望まないが、「自宅で看取ることは難しい（私が耐えられない）、最終的には病院で」と考えていました。

訪問看護はほぼ毎日岡島さんのお宅を訪れ、体調の確認や排便が上手くいかない時のケアを行っていました。困ったときに駆けつけてくれる看護師さん。正さんはいつも看護師さんが帰った後に手を合わせて「ありがとう」とおっしゃっていたそうです。奥さんも「排便のこととか、本当にいつも嫌な顔せずやってくれてとても助かった」と言われていました。またある日には看護師さんが訪問中にお二人が夫婦喧嘩を始めたことも。その時のことを聞くと「やっぱり（病気のこともあって）いらいらしてたんかな。でも看護師さんに気を許してたのもあると思う、エエかっこせんでもいい、身内みたいな感じ。でも看護師さんが帰った後にお父さん『嫌われたかな～』って気にしてたよ（笑）」在宅での大変な部分を看護師さんや家族の助けも借りて一緒に乗り越えていきました。そして奥さんの気持ちにも徐々に変化が現れたそうです。

みんなで写真を撮りました

家で看取ることを決意した恵美子さん

自宅での生活は看護師さんやお医者さん、また家族や地域の人たちの手助けもあり穏やかに過ごすことが出来たそうです。そんな日々を過ごす中で恵美子さんも当初は「最後は病院で」と考えていましたが、次第に自宅で最期までお父さんと一緒に過ごす決意が出来たとおっしゃっていました。「みんなに支えてもらった。一人では頑張れへんかったと思う、たぶん頭おかしくなってたやろな。看護師さんとか家族がおったから家で看取りをするって決心がついたんやと思う。ありがとうね」

思い出話が尽きません

岡島さん

お看取りを終えて ～看護師の訪問～

六月に岡島さんのご自宅へ訪問看護の職員が訪れました。久しぶりにお会いする奥さんもお元気そうなご様子で、部屋の中へ案内してくれました。話題は自然と正さんの思い出話へ。「お造りが好きやったんよ、カツオのたたきが特に好きやったわ」「細かいこだわりがありましたね、ベッドの角度とかもすごい気にしてたし」「いつも〝感謝〟を大事にしてた、信心深い人やったわ」「息子さんのことを本当に自慢にしてはりましたね」たくさんの思い出がよみがえってきます。最後の日には息子さんと二人で夫を見送った恵美子さん。正さんから「あんたと結婚してよかった、いっしょにご飯食べれてよかった」と言ってもらえた、感謝しながらすーと楽に逝けたと思うとおっしゃられていました。家をあとにする直前、奥さんから「あなた達のこと、お友達とかにも案内しとくからね」と言っていただけたことが、訪問した職員にはとても心に残ったそうです。

大阪きづがわ医療福祉生協は、患者さんとその家族に寄り添いながらケアに努めています。在宅での不安を少しでも和らげられるように、そして患者さんと家族さんの願いに寄り添えるような医療と介護の実践を行っています。

記事を読まれた皆様、ご感想をお寄せください。

お父さんが誉めてくれた奥さんの手芸